

アートワーカー（企画者）向けプログラム「CRAWL」選出企画

# キベラ “スラム” から見つめる世界

語られてきた私から、語る私へ。

2026.4.25（土）－ 5.31（日）

## ごあいさつ

「CRAWL」は、株式会社リクルートホールディングスが運営するアートセンター BUG が行っているアートワーカー（企画者）向けのプログラムです。企画書をコミュニケーションツールとして、メンターとの壁打ちや参加者同士のピアレビュー、ネットワーク構築などアートワーカーの機会と場をつなぎ、未来へつづくつながりを形成していくことを目的としています。

本展覧会では、ケニアの首都ナイロビにある巨大スラム・キベラに暮らす若者たちが撮影した写真・映像を通じて、「語られてきた存在」としてのスラム像を問い直し、「語る主体」として立ち上がります。

多くの若者が「将来の夢はジャーナリスト」と答えるのは、自身の存在を社会から無視され疎外されてきたという実感があるからです。寄付によって集まったカメラと、プロの写真家・映像作家による技術指導をきっかけに、彼女 / 彼らは自身の暮らし、よろこびや苦しみ、働く姿や生きる希望を記録しはじめました。これは単なる記録ではなく、「語る力」を獲得していく過程そのものであり、これまで外部の視点によって一方的に消費されてきた「スラム」のイメージを、自らの手で再定義していく行為でもあります。

本展では、100点を超える作品と、アーティスト自身による作品解説映像などを展示します。会期中には、キベラで暮らす若者に聞いてみたいことを質問し、後日返事が届く“対話”の機会を設けるなど、被写体と観客のあいだに「語りの往復」が生まれる場をつくりだします。東京の中心とはかけ離れたケニアのスラムでの視点を BUG のホワイトキューブに持ち込むことで、「表現すること」の根源的な力、そして、よろこびを問い直す試みです。

展示の感想をおきかせください！

BUG SNS

@bugart\_tokyo

Post on your SNS



アンケートフォーム

**SLUM** **BUG**

## 企画者・坂田ミギーからのメッセージ

本企画は、ケニア・ナイロビのキベラにおいて約 13 年にわたり教育支援や表現活動に関わるなかで、外部の視点から語られてきたキベラではなく「ここで暮らす人々にしか語り得ない経験や風景があるのではないか」と考えてきたことに端を発しています。キベラに暮らす若者やアーティストが、自らの視点で日常や社会を記録し、発信できる機会を創出することを目的に、本企画の構想が進められました。

その具体的な取り組みとして、映像作家の池谷常平およびフォトグラファーの政近遼が中心となり、日本国内で使われなくなったカメラを収集・寄付するとともに、現地の若者に向けた写真・映像制作の技術指導を行うプロジェクト「KIBERACTION」を実施しています。本プロジェクトの一環として、2025 年 4 月および 2026 年 1 月にワークショップを開催し、ムービーおよびスチール撮影の基礎的な技術レクチャーに加え、参加者自身による企画立案や撮影実習を行いました。

寄付されたカメラは現在、現地メンバーによって共同管理されており、申請制で共有利用できる仕組みのもと、継続的な制作活動に活用されています。ワークショップ参加者の中には、自ら脚本を執筆し、出演者を募り、寄付された機材を用いて短編映像作品を制作するなど、主体的な創作活動を行う若者も現れました。こうした姿を目の当たりにするなかで、キベラに暮らす人々自身が、自らの経験や視点をもとに地域を語る作品を生み出し始めていることを実感しています。

このような取り組みを踏まえ、キベラに暮らすアーティスト自身が、自らの視点で地域について語る展示を実現したいと考えていました。そうしたなか、アートセンター BUG が主催するアートワーカー（企画者）向けプログラム「CRAWL」において本企画が選出されたことで、東京での展示機会が実現しました。

これを受け、ワークショップ参加者に限らず、すでにキベラで写真家や映像作家として活動しているクリエイターにも広く呼びかけを行い、日本での展示機会を通して自らの作品や視点を発信したいと考える人々から応募を募りました。その結果、32 名から応募が寄せられ、書類選考および対面形式のオーディションを経て、最終的に 12 名のアーティストを本展の出展者として選出しています。本展では、こうしたプロセスを経て展示される写真・映像作品を通して、キベラに暮らす若者たちの経験や視点に基づく表現をご覧ください。

## 企画者プロフィール

### 坂田ミギー／Miggy SAKATA

Sler、広告制作会社、博報堂ケトルを経て、株式会社こたつを設立。

旅の途上で出会ったアフリカの孤児・貧困児童と女性へのサポートを目的としたエシカル・クリエイティブ・コレクティブ SHIFT80 ファウンダー、NPO 法人シフトエイティ代表理事。

旅やキャリアに関するエッセイ執筆、講演のほか、キャンピングカーをモバイルオフィス & 家として、日本各地を旅しながら働くスタイルを実践中。

著書：「旅の良書 2020」に選出された世界一周旅行記『旅がなければ死んでいた』(KK ベストセラーズ)、『かわいい我には旅をさせよ ソロ旅のすすめ』(産業編集センター) など。

受賞歴:Forbes JAPAN 2025 年「NEXT100:100 通りの世界を救う希望」、価値デザインコンテスト グランプリ・経済産業大臣賞、第11回女性社長アワード「J300 アワード」、Cannes Lions、New York Festivals International Advertising Awards、Spikes Asia、Ad Fest、広告電通賞など。ACC2022 審査員。



インタビュー  
映像

## 会場図面

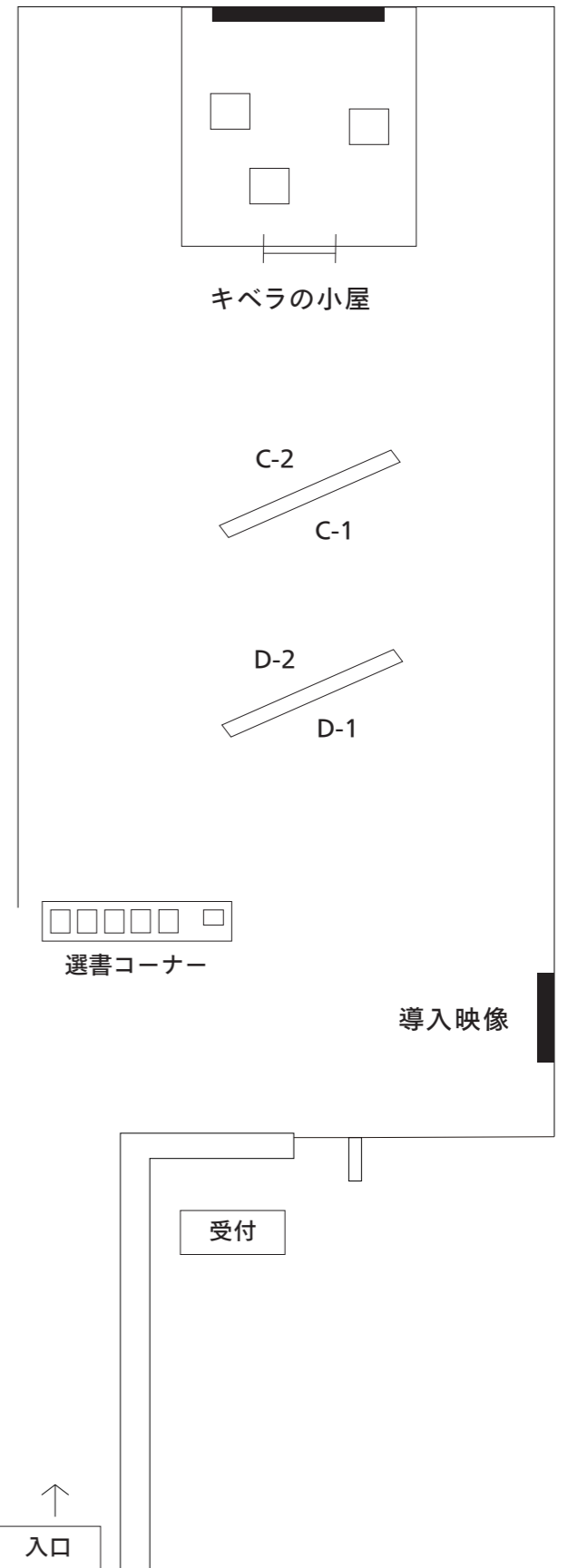
### 選書コーナー

会場内に、スラム・ケニア・アフリカについて書かれた書籍を集めた、選書コーナーを設けています。

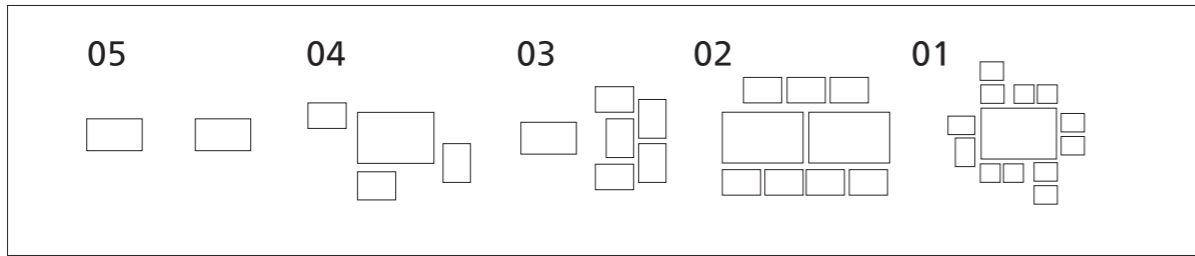
これらの多くは外部の視点によって編まれた書籍です。本展のテーマである「外部からの視点」を考えるための参考資料として、自由にご覧いただけます。選書は、渋谷区広尾を拠点とするブック・コミュニティ「Daily Practice Books」が担当し、20 冊の書籍を揃えています。


### 作品販売


本展では、展示作品を販売しています。キベラで活動するアーティストにとって、作品が販売される機会は多くありません。次の制作やプロジェクトへの資金を確保することは、容易ではない環境にあります。展示作品を各 1 点販売しています。販売収益は作家に直接渡され、次の制作やプロジェクトを支えるものになります。価格など詳しくは受付スタッフまでお気軽にお声がけください。



## 壁面A



作品  01.8KTV KIBRATV／エイトケーティーヴィー・キベラティーヴィー

解説  「Unbroken Voices — Life, Art, and Hope in Kibra」

「折れない声」と題された、キベラ中心部から届く13枚組の写真作品です。キベラティーヴィーが「写真をやってみたい」と思いはじめてから、実際に一台のカメラを手元に置けるようになるまでには、長い時間がかかりました。「ただ、目の前にある強い生、苦しみ、才能を『記録する責任』を感じたから撮影を始めた」と本人は語ります。本作に映るのは、遊び心や誇りを持って働く人、キベラで繰り返される火災、愛する人を想う家族の姿。「絶望の場所」ではなく、強さ・創造性・希望が流れ続けるコミュニティとして、キベラを切り取って伝えています。

作品  02.Sir.jeree／サー・ジェリー


解説  「SASA WAKATI ULE」

スワヒリ語で「今／あとき」を意味するタイトル。ジェリーはこの6年間、自らが住む土地を記録し続けてきました。本作が焦点を当てるのは、キベラに暮らす高齢者たちです。彼は3年間、高齢者デイケアセンターにボランティアとして通い、これまで語られてこなかった「老いること」の物語に耳を傾けてきました。写真の中の彼女／彼らは、かつての「あとき」と、変化してしまった「今」のあいだを行き来しながら生きています。ジェリーは自らを「翻訳者」と呼びます。キベラの内側で交わされている言葉や記憶を、外にいる私たちに伝わる形に置き換えていく。本作もまた、その翻訳のひとつです。

作品  03.Vin sekani／ヴィン・セカニ

解説  「The pulse of Kibera / Objects on the Mirror May Look Closer Than They Are(映像：13'32")」

高校生のころ、彼は本展企画者の撮影にモデルとして参加した経験を持ちます。初めて出会った日本の写真家・映像作家の仕事に触れたことで、この日から彼の夢はカメラマンへと変わりました。「撮られる側ではなく、撮る側を知りたい」その気持ちだが、2025年4月に開催したカメラスキルのレクチャー&ワークショップ KIBERACTION への参加にもつながります。本作は、日本から寄付されたカメラを使って制作されました。初めて本格的なカメラを手にして、わずか8ヶ月で彼がチームを組んで完成させた映像作品をぜひご覧ください。

作品  04.Big\_davido／ビッグ・ダビド

解説  「Faces of Kibra」

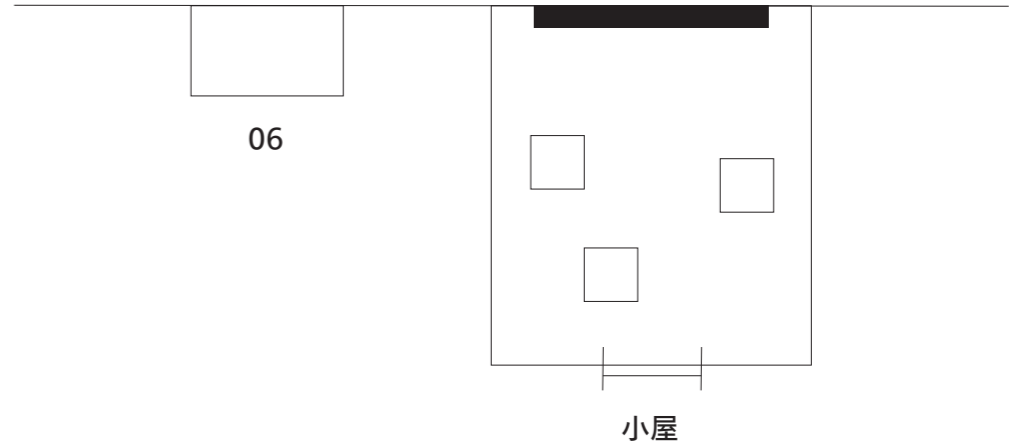
「誠実な瞬間(honest moments)を捉えたい」ダビドの言葉はシンプルですが、実はとても難しいことです。子ども、女性、そして薬物中毒者。それぞれの顔に、キベラでの暮らしが表れています。彼の写真は「表情」を通じて、キベラに流れる複数の時間を束ねようとしています。使用しているのは、日本から寄付されたカメラ。彼にとって、初めて手にする本格的な一台です。自分のものではなく、自由に使える時間も限られている。その条件のなかで向き合うからこそ、彼のまなざしは構図と物語にまっすぐ絞られていきます。道具と人との距離の取り方そのものが、作品の純度を支えています。

作品  05.Frankline Olando／フランクリン・オランド

解説  「BOI(映像：05'54")／UKO POA(映像：03'01")」\*本作には、暴力・自死を想起させる描写が含まれています。

「BOI」は、キベラでも起きているフェミサイド(女性殺害)を主題にした短編です。「UKO POA」は、「仕事がない苦しみ」が日常に横たわるキベラを起点にした物語。フランクリンは言います。「フェミサイドは、女性だけの問題ではありません。残される子どもたちと、次の世代の未来に、影を落とす問題なんです。日本の観客にも知ってほしいのは、キベラにも女性への不当な扱いが存在するという現実、そして、未来のために女性を守らなければならないということです」と彼は語ります。「キベラの人々自身によるアートには、大きな力がある。だから作り続けます」その信念が作品からも感じられます。

## キベラの小屋



キベラ的小屋

キベラの暮らしから持ち帰った、さまざまな日用品で彩られた小屋です。

この小屋の壁面は、古びて見えるよう汚し加工を施した日本製のトタンです。ただし、キベラで実際に使われているトタンは日本のものとは異なり、火のつきやすい素材のため、一軒の小屋から何十世帯まで一気に燃え広がる火災が、今日まで繰り返されています。

正面に掛かる黒いビニールシートの看板は、ある若者の店から譲り受けたもの。その店は、2026年1月に行われた強制撤去によって、もうこの世界には存在しません。

小屋の外には、キベラの小さな商店で買い集めた、一袋10ケニアシリング(約12円)の紅茶や砂糖なども並んでいます。一度に使い切れる量を、その日に買う。キベラの暮らしは、こうした小さな単位で回っています。

使えるものは極限まで工夫され、再利用されます。貯金箱は、ゴミとして捨てられていた空き缶。調理器具もジョウロも、職人が金属を一枚ずつ叩いて仕立てた一点もの。着古したベストや作業服は、そこで役目を終えることなく、次に必要とする人の手へと渡っていきます。

キベラの家多くには窓がなく、電気も小さな灯りがひとつあるだけで、日中も薄暗さのなかで暮らしが営まれます。この小屋も、プロジェクターの明かりだけを受けて、静かに暗がりのなかに置かれています。

足りなさを嘆くのではなく、あるものを回し、つなぎ、活かし切ること。この小屋は、キベラから持ってきたものたちで組み上げた、小さな体験の場です。家でもなく、商店でもない。ただ、キベラで確かに息をしていたものたちが、ここに集まっています。

作品  小屋| Frankline Olando／フランクリン・オランド

解説  「ANGRY HUNGER(映像：04'57")」

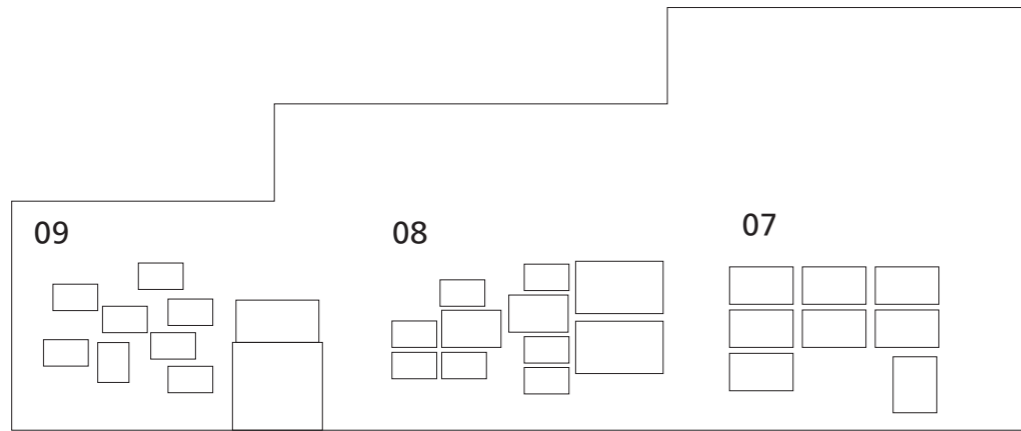
2019年、演じる側として映画の世界に入ったフランクリン。所属していたグループの監督が忙しく動けなかったため、自分で脚本を書き、役者を集めて撮影しました。それが彼のフィルムメイカーとしての出発点です。普段は配管工として働き、その給料で機材を借りて制作を続けてきました。彼は自身のパソコンを持っておらず、スマートフォンで撮影された作品も含まれるなど、制作のほとんどは限られた機材のなかで行われてきました。「機材がない」は「語れない理由」にはならない。フランクリンが示すのは、当たり前のように、繰り返し確認されるべきシンプルな事実です。


作品  06.Ramkalino KE／ラムカリノ・ケーイー

解説  「CHOREA(映像：06'11")」

ラムカリノが映画を作りはじめたのは2024年。「声に出せなかった感情を、どこかに置いておきたかった」と語ります。使用している機材は、撮影も編集もすべてスマートフォン。短編『CHOREA』は、恋に落ちた一人の青年が、犯罪の世界から希望と目的のある生き方へと変わっていく物語。「キベラは暴力的な人間しか生まない場所だ」というラベリングに、彼は物語の力で静かに問いを返しています。映像表現は「機材」ではなく「何を語りたいか」から始まる。本作はそのことを、端的に証明しています。

## 壁面B




作品  07.Asinina Ibrahim / アシニナ・イブラヒム

解説  「Nubian roots」

ヌビア人コミュニティのなかで育った、若い女性のフォトグラファーによる作品です。「ヌビア人に焦点を当てるのは、自分のコミュニティの文化とアイデンティティ、そして愛を、はっきりと伝えられると思うから」アシニナの短い一文に、本作のすべてが込められています。「キブラ(Kibra)」という名前は、もともと「森」を意味しました。ヌビア人は、この森だった土地に最初に住み着いた人々です。彼女のレンズが向かうのは、森の時代から続く文化、食、そしてそこに流れ続けている連帯感です。

作品  08.Ramadhan Said Ali / ラマダン・サイード・アリ

解説  「Belonging in Kibera — Nubian Life and Identity」

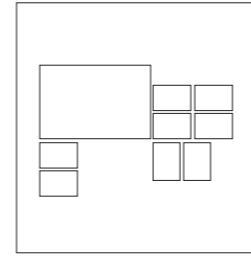
キベラが「スラム」と呼ばれる前、そこはヌビア人の土地でした。スーダン・ヌビア地方にルーツを持つ人々が、イギリス植民地期に軍の駐屯地として割り当てられた土地——それが現在のキベラです。ラマダンが写すのは、その土地でなお続くヌビア人コミュニティの祝い、祈り、家族の時間。土地の所有や承認をめぐる不確かさのなかでも、日々の営みは続いていきます。「同情ではなく尊敬を、ステレオタイプではなく複雑さを、統計ではなく人間の姿を」と訴える彼自身の言葉を携えて、一枚ずつゆっくりとご覧ください。

作品  09.Mc Popo / エムシー・ポポ

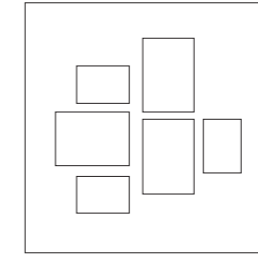
解説  「COMMUNITY IN MOTION / NEVER WISHED(映像：01'00")」\*本作には、暴力を想起させる描写が含まれています。

ポポが「キベラの前向きな物語を世界に伝える」と決めたのは2010年。キベラの若者たちはしばしば「貧しさ」の表現として撮られてきましたが、彼のレンズが映すのは、創造性と、生計を立てるためのスキルを身につけていく人々の姿です。犯罪やドラッグに向かうのではない選択肢を、コミュニティの中に作り出していく。子どものためのダンス教室を続けているポポが描くのは、アートとスポーツが若者にもたらす「安全な居場所とコミュニティ」です。その明るさの一方で、キベラの現実としてすぐそこにある絶望が、映像作品『NEVER WISHED』で迫ってきます。

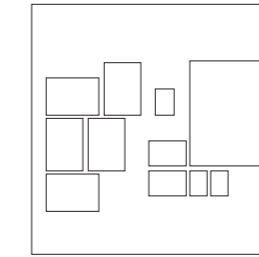
C-1 10



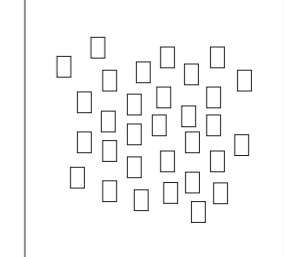
C-2 11



D-1 12




D-2 ★



作品  10.Dizze Dizze / ディジー・ディジー


解説  「Kibera's Unseen」

「キベラは美しいキャンパスだ」とディジーは言います。生まれ育ったこの街を「貧しさ」という一枚の紙で覆ってしまうまなざしに、彼はずっと違和感を持ってきました。彼はプライマリースクールの生徒(日本でいう小学生)にカメラを教える活動も行っています。本作に写っているのは、これまで語られてこなかった努力する人々の姿、そこにある美しさ、エネルギー、誇りです。ディジーはカメラ教室で、自身のコミュニティの美しさを発見するためのまなざしを子どもたちに伝えています。本作に並ぶ一枚一枚は、彼自身がそのまなざしでキベラに向けて撮り続けてきた作品です。

作品  11. スティーブ・バナー / Steve Banner

解説  「The Kibera Story」

スティーブがカメラを手にしたのは、2007年の選挙後暴動がきっかけでした。「自分たちのコミュニティが、主流メディアによって誤って伝えられている」と感じたことが原点です。国際メディアはしばしば「事件」が起きたときだけキベラを訪れ、その断片を世界に流していきます。しかしその後も続いていくのは、仕事に向かう朝、家族との時間、人と人との行き来といった日常です。スティーブは普段、キベラで理容師として働いています。椅子に腰掛ける人々の声に耳を傾けながら、同じ街の日常をカメラに収め続けて19年。本作に並ぶ一枚一枚の奥には、その時間の厚みと、地続きに暮らす者にしか気づけない視線の距離が、そのまま写り込んでいます。

作品  12.Ismael Photography / イスマエル・フォトグラフィー

解説  「Resilience」

子どものころから絵を描き、工作を続けていたイスマエル。写真は彼にとって、「瞬間を、戻ってこれる記憶に変える」メディアでした。本作『Resilience(しなやかな強さ)』に並ぶのは、働く、作る、家族を支える、おたがいに助け合う。キベラの日々を生きる人々の姿です。「統計としてではなく、一人ひとりを、価値ある物語を持った存在として見てほしい」という彼の願いとともに、ゆっくり一枚ずつ眺めてみてください。

★一枚、持ち帰ってください。

これらの写真は、キベラに暮らす人々によって、シンプルなフィルムカメラで撮影されました。

プロのアーティストではなく、日々を生きる人々による視点です。

残したいと思った瞬間。大切にしたい場所。そのままの暮らし。

それぞれの写真は、日常の一片であり、誰かが見つけ、選び、残した時間です。

どうぞ、あなたの生活の中で共にあるものとして、1枚持ち帰ってください。

あなたが持ち帰るのは、写真だけではなくありません。キベラとつながる、ひとつの窓でもあるはずです。

## 「語りの往復」に、ご参加ください

本展では、キベラに暮らす若者へ、ご来場のみなさまから質問や感想をお寄せいただける仕組みを用意しています。

あなたから彼女 / 彼らへ。そしてまた、彼女 / 彼らから、あなたへ。「語られる側」と「語る側」が一方通行ではなくなる、その小さな往復を、会期のあいだに少しずつ積み重ねていきたいと思っています。

質問は、会場内の所定の用紙からお寄せください。

後日、キベラの若者からの返信を SNS (Instagram @shift80official) でお届けします。

---

## クレジット

企画：坂田ミギー (SHIFT80)

会場デザイン・告知物デザイン・選書：堅田真衣

運営：片野可那恵、小林祐希、檜山真有 (BUG)

会場掲出物制作：堀田ゆうか、吉沢文江 (BUG)

広報：野瀬明子 (BUG)、高本育代 (Ubuntu)

翻訳：森本優芽、キース・スペンサー (Art Translators Collective)

会場スチル撮影：政近遼 (SHIFT80 / KIBERACTION)

インタビュー・字幕制作・会場映像撮影：池谷常平 (SHIFT80 / KIBERACTION)

設営：HIGURE 17-15cas